



2020年 3月 9日
第122号

JR 東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 助川 一実
編集 情宣 担当
ホームページ



<http://www.jreu-yokohama1.jp/>

横浜地本第24回定期地本委員会報告

地本執行委員長挨拶 (要旨)

執行委員長 助川 一実



今日の定期委員会で打ち固めるべきは、日本の労働者全体の闘争課題である20春闘勝利に向けてあらゆる職場活動を強化し、同時に国鉄改革への裏切り・逃亡者による組織破壊を許さず、「新生JR東労組運動」を推し進めるための横浜地本の方針を決定していくことです。

JR東労組第46回定期中央委員会が2月10日に開催されました。20春闘勝利に向けて、そして変革2027に基づく様々な施策に対する運動課題など中央委員会が重要な機関会議であったことは言うまでもありませんが、水戸・東京・八王子地本選出の委員不在の会議となっていました。JR東労組中央委員会を開催しているまさにその日に「JR東日本輸送サービス労働組合」という労働組合の名を借りた「組織破壊集団」の結成大会が開催されていたことから、中央委員会を欠席した者たちが「分裂・組織破壊労働結成」に無縁ではなかったことは明らかです。「JR東労組と決別」しボイコットしたのです。

横浜地本は「JR東日本輸送サービス労働組合」なる組織は、東労組の組合員を分断し、組合員を道連れにして悩ませ不安に陥れてきた労働組合ならざる組織破壊集団だと断定します。彼らは東労組としての職場集会や総対話を活用し、組合員に対して①新労組へ行くか ②東労組に残るか ③脱退して無所属になるか と三択を迫ったのです。「不当労働行為根絶」「あらゆるハラスメントを許さない」と訴えてきた彼らがこともあ

らうにJR東労組組合員に対して脱退を強要し、不当労働行為まがいに「どこにも所属しなくてもいい」など労働者を放り出すなど許せません。

長野地本の見解をご覧になってください。18年前の嶋田一味の組織破壊の果ての逃亡。「分裂で幸福になった者は一人もない」ということが組織破壊の歴史の最大の教訓だと訴えています。歴史上、JR東労組と決別した者たちが多数派を形成したためしはありません。東京地本でいえば、不適切な会計処理、規約上の使用目的から逸脱した資金の流用などが指摘されており、あまりに組合員を見下して軽視しています。今回の一部指導部による組織破壊策動は18春闘の失敗と中央本部打倒が叶わず逃亡したにとどまらず、「国鉄改革」を踏みにじり逃亡したのです。その一方で横浜運輸区分会結成に尽力した当時の蒲田車掌区・電車区分会出身の組合員は今回の分裂に心を痛めています。共に横浜地本をつくってきた仲間たちを支え、一緒に分裂・組織破壊を突破しようではありませんか。

今日まで横浜地本の組合員のみなさんが、水戸・東京・八王子の組合員のみなさんに様々な形で呼びかけ、訴えていただいたことに心から感謝を申し上げます。そして「JR東労組東京地本を守る会」「組合員のためのJR東労組を守る八王子の会」が結成されました。ホームページも開設されていますから、ご覧になり積極的に活用してください。彼らが水戸・東京・八王子の再建の核となるのです。横浜地本は固く連帯し12地本の総団結のために共にたたかっていくことを表明します。

中央委員会では「新生JR東労組運動宣言

」が満場一致で採択されました。「新生JR東労組って何だ」という役員や組合員の疑問に立脚して中央本部で議論を重ね、「JR東労組としての変わらぬ使命」として打ち出された宣言です。職場でJR東労組運動を実感することがなければ何が「新生」なのかかわるはずがありません。組合員に受け入れやすいことだけを提示していませんか。資料を配って終わり、あるいは掲示だけで済ませていませんか。会社施策や不当労働行為、組織問題であれしつかり伝えなければ組合員は不安でしかありません。職場で現れる問題や組合員の意識もそれぞれ。一人ひとり持てる石の大きさは違いますが、それぞれの持てる石をもって組織の意識を高めていく。できないことに不満を持つのではなく、どうすればできるかをみんな考えて答えを出すことが大切です。

2年前の18春闘の方針の誤りのトップダウンと組織の官僚化について、確かに反省はしましたがそれは今も今後も横浜地本にもどこにも忍び寄ってきます。その戒めも「新生JR東労組運動宣言」の中身です。委員のみなさんの真摯な討論によって20春闘をはじめとして横浜地本の方針を強靱なものにしていただくことを願います。横浜地本はすべての組合員と家族の負託にこたえるよう全力で取り組みます。



発言（要旨）

発言者（敬称略・順不同）

飯名正洋（川崎） 眞田直樹（川崎） 福羅一晃（横浜） 湯口博之（横浜） 井上義朗（横浜） 染矢和哉（大船） 五十嵐純一（大船）
藤原大樹（小田原） 杉山健太郎（小田原） 藤代朋和（小田原） 森泉勝巳（運車） 平田正広（営業） 杉村武（かんり）

●職場の仲間とのレクリエーションなどを通してコミュニケーションをとってきた。何でも言える良い雰囲気職場環境ができています。今の良い雰囲気の職場を守っていく。

●駅職場の人員不足は深刻。駅長から支社にも話しているようだが改善される様子が見受けられない。新入社員の配属次第で慢性的な人員不足が続くことが予想される。横浜支社としてどのように考えているのか把握してほしい。

●JESS社員も車イス対応が必要だが今まで経験がない。人員に余裕がなく教育もできていない。出向者でも簡易苦情処理の権利を知らない人もいた。もっと労働組合の存在意義を周囲に伝えていかなければならない。

●びゅうトラベルサービスは、4月より新旅行業システムを稼働し、顧客接点型拠点となるが、業務内容や要員規模が明らかにされていかない。指定席券売機などシステム更新の際には必ずエラーが起きる。会社はリスク管理を徹底してエラーを撲滅するべきだ。駅の要員や教育の現状から2020オリピック・パラリンピック東京大会に対応できるのか不安。

●台風19号による計画運休時に職場では多くの問題が発生した。①出退勤の問題②食事提供の問題③タクシー代・宿泊費の個人負担④区所ごとの対応の違い⑤運転再開時の対応⑥情報提供の少なさ⑦管理者からの労いの言葉がない等、集約した組合員の声を会社と議論をする場をつくった。そしてその議論内容を組合員を含めた職場の社員に返した。結果、職場では大きな反響があり東労組運動を実感できるたまたかとなった。

●第二基本給の凍結は実感ある退職手当と共に私たちの将来に不安を増大させないために必要だ。私たちの行動、参加で「満額獲得、要求・要望実現」を目指す。定期中央委員会で示された「新生東労組」の「運動方針の4本柱」は東労組運動の原点を改めて示している。自分次第で状況は変えられる。本部、地本方針のもと日々奮闘していく決意だ。

●組合員はいま話したい、聞いてほしいという思いが強いということを感じている。会社施策が次々と進められている中で、東労組の必要性を語る東労組未加入の仲間もいる。組織問題もあるが、乗り越えてJR東労組の再確立を目指していきたい。

●任期の途中で東労組脱退を通告してきた役員がいる。絶対に許せない。春闘真っ只中であって、組織化を中心に行わなければならない人物が逃げていった。支部、地本と一緒に奮闘していく。

●東京・水戸・八王子地本の一部指導部による組織破壊を断固として許すことはできない。国鉄改革を担った仲間への裏切りだ。あの苦労があったから今の東労組がある。国鉄改革を思い返し、原点に立って東労組運動を進めていきたい。

●分裂組織を立ち上げたのは、東労組をリードしてきた人たち。活動に割いている時間や真剣さは常に学ばされるものがあった。しかしなぜ分裂してしまったのかと言えば、自己保身なのではないか。労働者は強いものに逆らえず、利益につられてしまう。だから絶えず関わり合い、運動することが必要。運動を継続するためには少数精鋭ではなく、多くの賛同を得て仲間を増やし目的に向かっていくことが大切だ。

●東京地本の仲間本部への不満と分裂組織への不安を打ち明けられた。東労組の労働協約の内容は出向、ライフサイクル、新たなジョブローテーションなど多岐にわたること、労働協約は嘘をつかないということを伝えた。引き続き関わりを持ち、事実を伝えていきたい。

●一人で活動しても、組織強化・拡大へは繋がらない。点の活動を線にしていくことが必要だ。分会などの仲間と情報共有し、みんなで明るい職場の雰囲気をつくってきた。

●秋のたたかいで台風被災者支援カンパ、分会大会の開催、レクリエーションの開催などに取り組んできた。分会ごとに状況が違うこと、支部の関わり課題が見えてきた。議論の場をつくり事情や悩みを出し合って前に進んできた。今後も認識や方向性を合わせるための議論を目指していく。

●対話を大事にすることを心がけてきた。再加入への課題の一つは「固定観念は悪、先入観は罪」である。固定観念や先入観、あらゆる感情的なものを排して共に働く労働者の苦しみを少しでも取り除くという情熱が組織拡大には必要だ。JR東労組が組合員に対してとるべき手段は「愛情」である。組合員と共に歩む、知らない組合員をつくらないという方針は愛情路線。それが「ヒューマニズム」である。今後も愛情路線で組織強化、拡大を勝ち取っていく。

横浜地本全組合員の力で 明るい未来を切り拓こう！

地本書記長総括答弁(要旨)

書記長 梶田 優一



2年前、私たちは大きな過ちを冒しました。18春闘の大敗北により、35000名もの組合員を失い。組織は大きく減少しました。横浜地本は、2018年3月7日の春闘総決起集会を「組合員と共に歩む集会」へと切り替え、ここを起点に転換を図り、トップダウンとぶら下がりを反省し、組合員の声に耳を傾け、総括を深めてきました。

会社からは、堰き止めていた施策が雪崩の様に次々と提案され、特に社会の変化を受けた変革2027に伴う各系統の諸施策は、私たちの働き方と生活を大きく変えるため、組合員に大きな不安をもたらしました。今もその不安は払拭されていませんが、私たちは限られた時間の中でも、ただ単に反対を叫ぶのではなく、変化にどう対応するのかを、職場から議論し、真正面から向き合ってきました。

しかし、18春闘の大敗北総括に向き合えない、東京、水戸、八王子の一部役員たちは、自ら打ち出した「格差ベア永久根絶」「指名スト」方針の誤りと失敗を誤魔化すため、反転攻勢を声高に叫び、18春闘を切り離し、あったことをなかったことにしました。そして、東労組の再生を誓い、組合員の信頼を取り戻そうと奮闘する、中央本部と9地本を「御用組合」と罵り、批判・誹謗中傷を加え、大会決定や機関会議決定もことごとく無視して、私たちの運動を妨害してきました。さらには、組織破壊のホームページ「真実の声」を東京地本の元役員が運営していたことが発覚、その役員が使用して

いたパソコンからは、東労組の乗っ取りと組合費の横領計画が明らかになり組合員がその真実を掴むと、制裁から逃れるために、組合員に「新労組に行くか？東労組に残るか？脱退して無所属でいくか？」と3択で迫り、最後には東労組に残る道を断ち「俺たちについてくるか？脱退するか？」の2択で迫り、道連れの組合員を引き回し分裂組織を立ち上げました。東京、水戸、八王子地本内に所属する組合員に、真実が伝えられることはありません。過日開催された、定期中央委員会では、かんり部会の委員から「東京地本内の部会員が心配だ。近くにいる人が耳元で訴え続けると嘘も本当になるんです」と発言されました。

しかし、私たち横浜地本の組合員であっても、正しい情報が伝わっていなければ、同じように感じるのではないのか。ですから、組織問題を含めた、真実を知らない組合員をつくらないため、3月5日の春闘総決起集会まで、全組合員との総対話を要請します。特に、組合員同士が意見交換できる職場集会という形式を追求していただきたいと思います。そこに、地本、支部役員も呼んでください。

私たちは、2月10日開催の定期中央委員会で新生JR東労組運動宣言を採択し、新たなスタートを切りました。時代認識、正しい情勢分析とありますが、これが18春闘の最大の教訓です。

中央本部は、この新生JR東労組運動宣言を全職場で掲出することとしています。しかし、ただ掲出しているだけでは、ただの壁であり、何の意味もありません。新生JR東労組運動宣言は、東労組内の全地本、全系統、全職場、全組合員を想起していますので、普遍的なものです。しかし、現実

は職場毎に違います。ですから職場毎に、職場の実態に合わせた運動を実践することで、ここに書かれている事が実感されてくる様にならないければなりません。つまり、東労組の運動を、労働組合の存在意義を、全組合員が実感する取り組みを職場からつくり出すということです。

賃金引き上げ、つまり春闘は一番組合員が実感しやすい取り組みです。「情勢はどうなっているのか？」「東労組の要求はどうなっているのか？」を知らない組合員をつくらず、3月5日の春闘総決起集会に最大結集していただきたいと思えます。

春闘集会には、賃上げの他に、もう一つ課題を設けています。今、「よこはまネット」や「ひがし」、タブレットを見てみると、組合員は置いて行かれるのではないかという恐怖感を感じるということなのです。

現在私たちは、第4次産業革命の渦中にいます。1次が蒸気機関、2次が電気、3次がコンピュータ、そして、現在のAIの発達になります。人類の歴史は240万年といわれていますが、その中でこれだけ大きな社会の変化点はそうそうありません。その中に私たちは今立っているということなのです。不安を感じない方がおかしいと言っても過言ではないと思います。したがって、私たちはこの変化にどのように対応していくべきなのか？ジョブローテーションや「変革2027」に伴う各系統の諸施策を検証しながら、考えるきっかけをつくりたいと考えています。

私たち東労組と分裂組織の違いは何でしょうか？ 彼らは、「少数派になっても良い」や「たかえる者だけだたかえば良い」と言っ

てきました。

2月10日の定期中央委員会の特徴は、医療部会を除く工務、営業、運車、かんり、きかく全部会の仲間から発言があったということです。そして、全地本が発言しました。東京と八王子地本を守る会の参加もありました。強弱はあるけれど、全組合員を代表した委員・傍聴がそろって委員会をつくり上げたというところに特徴があります。

かんり部会の仲間からは「管理者は国鉄時代、組合員ではなかった」と発言がありました。

私たち東労組は、国鉄改革を経て、33年前に立ち上がりましたが、そうした強弱を含めて皆で議論しようと思いません。しかし、いつしか変質し「少数派になっても良い」「たかえる者だけだたかえば良い」となってしまうました。それが18春闘の「格差ベア永久根絶」だし「指名スト」です。全組合員一律と言いつつ、戦術そのものは組合員の分断だったのです。ですから、分裂組織は国鉄改革の否定なのです。どのような大義名分を掲げようが、そのことは歴史が証明します。

新生JR東労組とは、新たな東労組というより、国鉄改革の精神に基づき、変質してしまった東労組をもとに戻すということだと私は思っています。発言にあった「原点に立つ」が正にその通りだと思います。

職場に新生JR東労組運動宣言を堂々と掲げ、再スタートを切ろうではありませんか。以上、本委員会の総括答弁とします。ありがとうございます。